

# 令和元年度 学力向上先進地域視察研修報告 (埼玉県・久喜市教育委員会、羽生市立羽生北小・羽生南中学校)

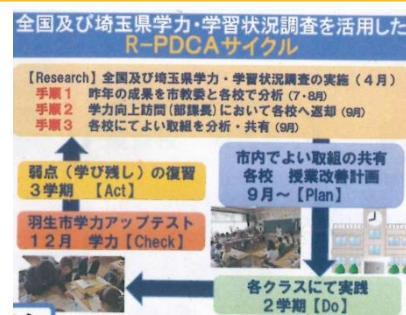
## Aグループテーマ:「学力の基盤づくりとなる取組」

### 取組の実際

※各グループのテーマは、学力向上プランの5つの視点に基づいています。

#### ◇ R-PDCAサイクルを活用した学び残しをなくす取組

- ・全国及び埼玉県の学力調査(4月)の結果を分析し(7、8月)、成果のあった取組(よい取組)を各学校で共有する。また、よい取組を参考に、各学校で授業改善計画を作成する(9月)。
- ・各調査結果から課題のあった問いを取り上げ、課題を克服するために各教科で取り組めることを洗い出し、実践している。
- ・羽生市学力アップテスト(12月)の結果をもとに、児童生徒の学び残しを分析し、学び残しの復習を重点的に行う(1月～3月)。



#### ◇ 学級経営を基盤とした学力向上の取組

- ・「学力」を、「目に見えない、これから生きる力、生き抜く力」ととらえ、特別活動を重視した学級経営を行っている。その際、子どもたちが何をやりたいのかを見定め、それを自主的・実践的な活動につなげることで、学級経営の充実を図っている。
- ・学校の教育目標の実現に向けて、全クラスが学年、学級の実態に応じて目標を設定し、同じ方向を向いて取り組んでいる。



### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 4月の全国学力・学習状況調査及び6月の福岡県学力実態調査の結果について、学力層ごとに課題を分析し、効果のあった取組(よい取組)や授業改善の視点を明確にする。
- 各調査結果の分析をもとに児童生徒の学び残しをなくすための R-PDCAサイクルを計画し、夏季休業中に全職員で共通理解を図る。
- 校内研修担当や学力向上コーディネーターと連携し、各調査結果を全教職員で共通理解を図る校内研修を計画する。

#### 【校内研修担当・学力向上コーディネーターとして】

- 夏季休業中に、調査結果を学校の課題としてとらえ、課題を克服するために何が出来るかをそれぞれの立場(担任、教科担当等)で考え、9月以降の授業実践につなげるための校内研修を行う。

#### 【学年主任・学級担任として】

- 学校の教育目標をもとに、4月に学年及び学級で育てたい力を明確にして学年経営案・学級経営案を作成し、実践する。また、特別活動を通して、学び合う集団づくりに取り組む。

#### 【先進地域視察研修を通して実感したこと】

- 各調査結果の分析(学力階層ごとの課題の分析、経年比較等)を細かにやり、児童生徒の伸びやつまずきを見取り、授業改善に生かすことが大切である。
- 児童生徒の学力の課題や質問紙の結果等を学校全体の課題としてとらえ、全教職員で課題克服に向けて取り組むことが大切である。
- R-PDCAサイクルに則り、よい取組を行っている授業等を分析し、全教職員で共通理解し取り組むとともに、学び残しをなくす取組を行うことが大切である。

## 共通テーマ「授業づくりについて」

### 取組の実際

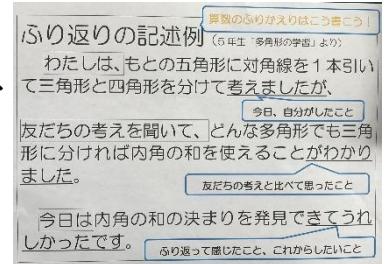
#### ◇ 小中9年間で統一された1単位時間の授業構成

- ・児童生徒が見通しをもって授業に取り組むことができるように、小中9年間で「つかむ→考える→伝え合う→振り返る」という授業の流れを統一している。
- ・学びの質を高めより深い学びになるように、目的に応じて「伝え合う活動(ペア、4人、フリー等)」の形態を工夫し、授業に取り入れている。
- ・小学校から「伝え合う活動」に取り組むことで児童は着実に説明する力を身につけており、中学校での活動が充実したものになっている。



#### ◇ 振り返り活動の充実

- ・算数において、児童が自分の学びの状態を「ステップ1:分からない→ステップ2:分かった→ステップ3:説明できる」の三段階で振り返り、評価することで、教師は理解が十分にできていない児童への重点指導を行うことができる。
- ・1単位時間の終末に振り返りの時間を設定し、本時で学んだことを課題に沿って表現させることで、学びの定着を図っている。
- ・振り返りに書かせる内容や書き方などを例示することによって、振り返りの内容を充実させ、書き力の育成を図っている。



### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【校内研修担当者として】

- 年間の研究授業や授業公開週間等を計画し、1単位時間の授業構成や振り返り活動について共通理解するとともに、よい授業、よい取組を広げる。
- 授業を参観する視点(授業者の工夫)を明確にし、その視点に基づいた授業協議会を行うことで、授業を具体的に分析し、効果のある指導方法について共有する。

#### 【担任・教科担当として】

- 全授業に振り返り活動を位置づけ、本時で学んだことについて自分の言葉でまとめさせる。その際、書く内容について、発達段階に応じて具体的に例示(自分がしたこと、友だちの考えと比べて思ったこと、振り返って感じたこと、これからしたいこと等)することで、学びの定着を図り、次時への学習につなげる。
- 振り返りをもとに、児童生徒の学びの状態を細かに把握・分析し、次時からの授業改善に生かす。

# 令和元年度 学力向上先進地域視察研修報告 (埼玉県・久喜市教育委員会、羽生市立羽生北小・羽生南中学校)

## Bグループテーマ：「『書くこと』を重視した授業づくり及び授業評価」

※各グループのテーマは、学力向上プランの5つの視点に基づいています。

### 取組の実際

#### ◇『書くこと』を重視した授業づくり

##### ○ノート指導の充実

・全学年がマス目付きノートを使用し、課題(めあて)とまとめの振り返りを書くことを統一。マス目を使用することで作文指導を日常的に行える。

##### ○マイマイ作文

・テーマや条件を付けた作文を毎週末に家庭学習として取り組ませる。  
・発達段階に応じた無理のない分量やテーマ設定する。  
・書いた作文は、教師が必ず添削し、児童の意欲を高める。

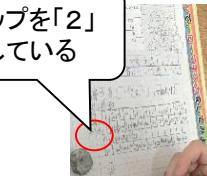
#### ◇授業評価を生かした授業改善

##### ○わかるステップ1・2・3・3+

・算数の学習における児童が考えをつくる場面で、児童に課題解決の状況を、1(わからない)、2(答えは出せる)、3(説明できる)、3+(分かりやすく説明したり、友達の考えを生かすことができる)で評価させ、評価の状況に応じて授業の展開を教師が工夫する。また、次時の授業の構想に役立てることができる。



ステップを「2」と表している



### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【学級担任として】

- 日々の授業でマス目を意識したノートづくりをする。板書をするときにも、ノートのマス目に合わせた文字数や位置などに配慮し、ノート指導の充実を図る。
- 書く活動を多く取り入れる。授業において「めあて」「自分の考え」「振り返り」の時間を位置づけ、書く力の積み上げをねらう。
- 授業において、自己評価をする場面を設定する。教師と児童生徒が理解度を共有することで個に応じた指導を充実する。

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 1時間の学習過程に「めあて」「自分の考えをつくる時間」「まとめ」「振り返り」を位置づけた、学習の流れを提案する。
- 「書くこと」の力をつけるための活動を、学校教育活動全体に位置付けていく。たとえば、小学校であれば、各学年の発達段階に応じた「書く活動」を位置付けたり、中学校であれば各教科等における書く力の向上に向けた取組などを明確にしたりするなどが考えられる。

### 【先進地域視察研修を通して実感したこと】

- 児童生徒が課題解決に向けて思考し、判断したことを表現させるためには、「書く力」の向上は不可欠である。「書く力」の向上のために、小学1年から中学3年まで、9年間を見通した「発達段階に応じた書く活動」を設定することが大切である。
- 児童生徒の「学習の評価」に基づいた授業改善を進めていくために、全教科で学習を振り返りの活動等の実施、改善が必要である。

## 共通テーマ「授業づくりについて」

### 取組の実際

#### ◇振り返り活動の工夫

##### ○ふりカエルカードの取組

・中学校全教科統一して「ふりカエルカード」をつくり、毎時間の振り返りを確実に実施できるようにしている。生徒の言葉で振り返らせることで学習内容の定着を図るとともに教師は評価、授業改善に生かしている。



#### ◇対話的な学びの工夫

##### ○南中シェアタイム

・1単位時間の考えを深める段階においてシェアタイムを位置付けている。その際に、ワークシート、ヒントカード、キーワード等の支援の工夫を行っている。また、学習形態(ペア、グループ、フリー等)を内容に応じて設定することで、生徒の教え合い、学び合いが効果的に実施されるようにしている。



##### ○同じ考えのグループによる交流活動

・同じ考えをもつ児童をグループをつくり、ホワイトボードを活用した交流活動を設定することで、自分の考えを確かなものにし、変容をつかんだりすることができるようにしている。

### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【学級担任として】

- どの教科においても、1単位時間に、学習形態を工夫した交流活動を位置付ける。活動を行う際には、児童生徒が考えをつくる場面と考えを表現する場面を段階を踏んで設定する。
- 授業の終末段階での学習の振り返りの活動を充実する。この活動によって、次時の学習に児童生徒が課題をもって臨むことができる。また、振り返り活動を行う際には、児童生徒が主体的に学習を振り返ることができるようにするために、視点を明確にした記入するためのカードを用意する。

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 学力向上コーディネーターや研究主任と協働して、1単位時間の学習における導入・展開・終末の活動内容を再構築する。
- 学習形態を工夫した交流活動の在り方についても検討し、児童生徒が主体的に自分の考えをつくり、表現する場を設定する。
- 児童生徒の学習評価に基づいた授業づくりを行っていく。日々の学習評価と授業改善がリンクした取組を構築する。

# 令和元年度 学力向上先進地域視察研修報告 (埼玉県・久喜市教育委員会、羽生市立羽生北小・羽生南中学校)

## Cグループテーマ:「教員の意識・指導力の向上」

※各グループのテーマは、学力向上プランの5つの視点に基づいています。

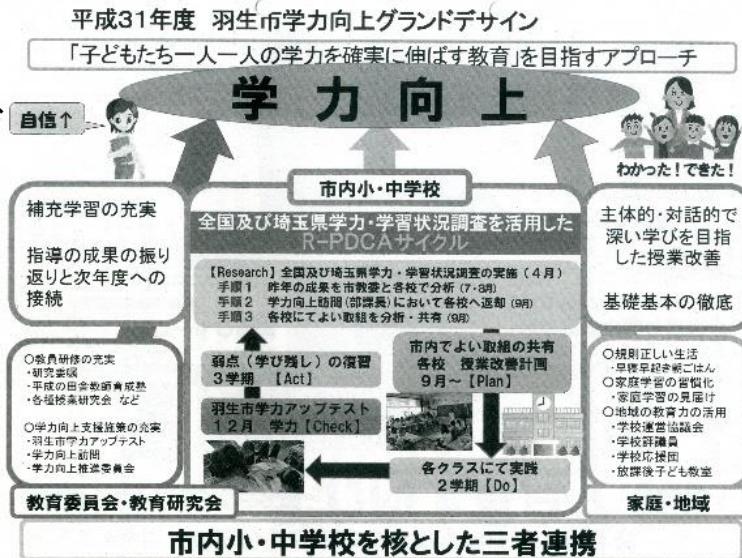
### 取組の実際

#### ◇ 学力テストを活用したR-PDCAサイクルの機能化

4月に「全国学力・学習状況調査」と「県学力実態調査」を実施し、その結果を夏季休業中に分析することで、2学期からの実践に生かし、12月の「市学力テスト」で見取り、3学期に学び残しがないようにしている。さらに、1学期中に行った実践の中で、効果的な取組を集約し「よい取組集」を市内に配布し実践を呼びかけるなど、市教委が中心となり、R-PDCAサイクルの機能化が図られている。

学力を「これからの時代に必要な力」として捉えた校長の明確なビジョンのもと、市教委と学校・家庭・地域が協力して取組が行われていた。

学力テストの結果のみではなく、非認知的能力を見取るためのアンケートを実施し、市教委が集約・分析を行い、学校へ還元するという仕組みが構築され、「授業で、どの子どもたちに、どんな力を付けさせたいのか？」が明確に示されていた。校長のリーダーシップにより、職員の意識向上を図る取組が数多く実施されていた。多くの取組が効果的に実施するために、育みたい児童生徒の姿を明確にし、常に立ち返るというスタンスでの学校経営が実践されていた。



### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 子どもたちの実態を、学力面だけではなく、非認知的能力も見取ることができるようなアンケートを構築する。
- 取組の成果を「見える化」することで、職員集団の意識を高める。
- 活動等の提案の際には、活動の目的を子どもの姿で示すことを心がける。

#### 【校内研修担当者として】

- 全職員で共通理解を図り、共通実践できるように、納得のいく効果をデータとして示す。
- 効果のある実践例や各教員の取組の良さなどを、通信等を用いて積極的に発信する。
- 授業の振り返りの活動などを各教科の共通実践事項として設定する。

### 【先進地域視察研修を通して実感したこと】

- 学力向上のためには、綿密な実態把握による職員の目標・ゴール像を明確に示すことが大事であり、当たり前のことを全職員で徹底して行うことが必要である。
- 「主体的・対話的」な授業を展開するためには、話し合いや授業の仕組み、手だてを共通理解した上で実践することが大切である。

## 共通テーマ「授業づくりについて」

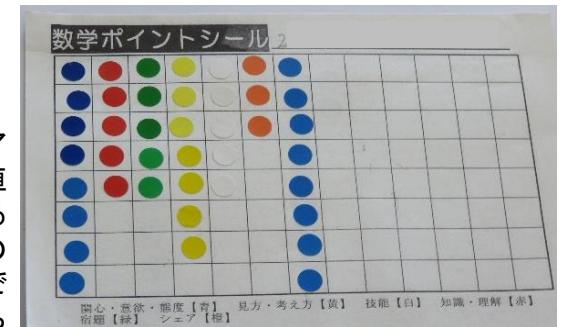
### 取組の実際

#### ◇ 授業の流れの統一(北小・羽生ベーシック)、授業の構造化(南中・南中スタンダード)

若年教員の指導力を高めていくために、一単位時間の授業の流れを小、中学校で統一した実践が行われていた。全ての教員の教え方をそろえることで、重点化する手だてを明確にすることができる。また、児童生徒にとっても、見通しをもって授業に参加できることにつながり、次の目標をもちやすくすることができる。特に南中では、授業前にすることと授業中にすること(話型、姿勢)を統一しているため、より効果的な授業が行われていた。

#### ◇ 「対話的な学び」のための工夫

対話的な学びを活性化させるための手だてとして、「南中シェアタイム」があった。どの教科領域でもシェアタイムが位置付けられており、子どもたちにとって価値ある時間となっていた。また、どの教員でも実践できるように、明確な方策が「形態」、「視点」、「アイテム」の項目でまとめられていた。実際のシェアタイム(数学)では、考えを共有するだけでなく先生役の生徒が友だちに教える活動が設定されており、友達を正答に導くことができたかどうかについても評価するなどの工夫がなされていた。このような活動が、研究のための手だてとして一時的なものとしてではなく、日常化されていた。



#### ◇ 振り返り活動の工夫

振り返り活動を充実させるために、中学校では、「ふりかエルタイム」が位置付けてあり、まとめる段階で、自分の言葉で課題に沿って自己解決の段階について振り返る活動が設定してあった。この取組が全校で統一して行われていた。

### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 教育指導計画に基づいて、特別活動の確実な実施を行っていく(支持的風土の確立)。
- 授業スタンダードの徹底(当たり前のことを当たり前のようにしていく)。

#### 【校内研修担当者として】

- どのキャリアステージにある教員でも、授業デザインの大きな型に沿って授業づくりに臨むことができるように明確なデザインを提示する。
- 「授業スタンダード」や「学び合いの工夫」など、良い取組事例をまとめ、どの教員も授業改善に取り組みやすくする。
- どの教科領域でも活用できる「振り返りシート」の提案や、書くモデルや内容などを提示する。

# 令和元年度 学力向上先進地域視察研修報告 (埼玉県・久喜市教育委員会、羽生市立羽生北小・羽生南中学校)

## Dグループテーマ:「学校全体の組織力、家庭・地域との連携、及び児童生徒の『非認知的能力』の育成」

### 取組の実際

※各グループのテーマは、学力向上プランの5つの視点に基づいています。

#### ◇ 全職員による連携した研究組織

羽生北小では研究の組織として、研究授業の実践を進める【授業研究部】(国語部)(算数部)と学習環境づくりを進める【学習環境部】(調査統計部)(環境整備部)(広報部)による連携が図られていた。南中では学校全体で①授業の構造化②場の構造化③時間の構造化を横断的に統一していた。

#### ◇ 適材適所による人材育成

学校の組織運営として「適材適所」を意識している。学力を上げた教師や若い教師、苦手な教科がある教師と様々である。そのため、人材育成を意識した分掌等への配置を行っていた。さらに特命係という1年期限の分掌を設定するなど、教師のやりがい感をもたせる工夫がなされていた。

#### ◇ 県学力・学習状況調査データ活用事業における分析

県・市が主にデータを一括管理し、分析して活用できるデータを各学校に配布している。そのデータを各学校が積極的に授業改善や学級経営、個別支援等に生かしている。

#### 【Research】 学習方略・非認知的能力 学力の伸び

- 手順1 昨年の担当の成果を市教委と各学校で分析(7・8月)
- 手順2 学力向上訪問(部課長)において各学校へ返却(9月)
- 手順3 各校にてよい取組を分析・共有(9月)
- ※よい取組の市全体での共有化と実践の共有
- 手順4 12月にテストを実施し、3学期の取組に生かす
- 手順5 学級のデータを次年度の学級及び中学校に渡す

埼玉県学力・学習状況調査を活用したR-PCDAサイクル



#### ◇ 地域・保護者への啓発

学力向上通信で学校の取組を保護者に啓発したり、学校行事等と参観を同じ日に行うなど、意図的・計画的に保護者を教育活動に取り込む。

### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 自校におけるR-PCDAサイクルの確立
  - ・次年度のResearchまでを見通した学力向上ロードマップの作成と年間計画への位置付け
  - ・非認知的能力の向上のための学校行事の計画実施を通じた評価の場の設定
- 学力向上のための組織運営
  - ・校務運営の核となる各部会の主任への働きかけ
  - ・共通確認事項の実施状況の把握

#### 【校内研修担当者・学力向上コーディネーターとして】

- 子どもたちの実態分析における6つの学習方略の活用
- 共通確認事項(学習スタイル・ノート指導・学習規律等)の提案と具体化、及び学力向上通信による啓発

### 【先進地域視察研修を通して実感したこと】

- 今後、若年層が増えるため、適材適所による組織的な学校運営のもと、9年間を見通した指導計画の作成、学校・家庭・地域が一体となった児童・生徒の育成が大切である。
- 非認知的能力が学力を支えるという視点から、R-PCDAサイクルによる評価・改善サイクルの見直しを進めていく必要がある。

## 共通テーマ「授業づくりについて」

### 取組の実際

#### ◇ 全校で統一したことの凡事徹底

・学習の進め方、ノートの取り方、発表の仕方等の共通理解と日常的な取組

※学習の進め方:南中スタンダード(つかむ・考える・伝え合う・振り返る)

#### ◇ わかるステップ1・2・3・3+を使った自己評価

- ・学習問題を把握し、自分で考える段階での自己評価の実施
- ステップ1:解き方が分からない      ステップ2:解き方が分かる
- ステップ3:発表、説明ができる      ステップ3+:ステップ3以上
- 自己評価を基に、個別支援や授業スタイルを変更
- ・振り返りの段階で自己評価の実施(ノートに記述)→自己伸長の自覚

#### ◇ 学習規律の徹底「田は日照り」「南中授業の約束」

〈羽生北小〉

・「田は日照り」(タイム着席、「はい」、ひじをのばす、「～です」「～ます」、りつよう)を合言葉にした児童自身による主体的な学習規律の整備

〈南中〉

・「南中授業の約束」「南中シェアタイムのルール」の設定による、落ち着いた学習規律の整備

#### ◇ 振り返りの積み上げ

・振り返りタイムの設定(書いていなくてもOK)



### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教務担当主幹教諭として】

- 子どもの自己評価等を活かした授業改善プランの年間カリキュラムへの位置付け
- 「よい取組」の共有と実践への呼びかけ

#### 【校内研修担当者・学力向上コーディネーターとして】

- 児童・生徒を見取る視点や方法を研修し、全学年・全教科でその日常化
- 学習の定着状況の実態と児童・生徒を見取る具体的な視点をもつために、全国学力・学習状況調査等をもとに「身に付けさせたい力」や「子どもたちの傾向性」の整理と、共通理解を図るための場の設定

# 令和元年度 学力向上先進地域視察研修報告 (埼玉県・久喜市教育委員会、羽生市立羽生北小・羽生南中学校)

## Eグループテーマ:「教育行政としての取組」

### 取組の実際

※各グループのテーマは、学力向上プランの5つの視点に基づいています。

#### ◆埼玉県の学力向上の施策

『埼玉県学力・学習状況調査を中核としたPDCAの推進』

#### ◇一人一人の学力の伸び(経年変化)に着目する

- ・県学力調査(小学校4学年から中学校3学年まで対象)の問題に難易度を設定し、学力のレベルを評価できるようにしている。
- ・非認知的能力や学習方略等のアンケート調査を実施し、学力の伸びとの相関を分析できるようにしている。

#### ◇授業改善へつなぐ取組

- ・学力を伸ばしている教員が行っている取組を「よい取組事例集」としてまとめ、各学校に配布
- ・調査結果や指導等を一元化して引き継ぐカルテの作成・配布
- ・学力の基盤となる非認知的能力等を伸ばすための学級経営の重点化

#### ◆久喜市教育委員会の施策 『本気・本樹の学力向上プロジェクト』

#### ◇小・中9年間をより丁寧につなぐ

- ・KST(久喜市ステップアップテスト:小4から中3で毎月)の実施  
→市教委で結果を取りまとめ、個票や復習プリントの作成をサポート

#### ◇個の課題に寄り添う補習学習

- ・外部指導者による毎週1回の無料の補習学習「くき本樹塾」の実施

#### ◆羽生市教育委員会の施策 『学力向上重点7』

#### ◇学力向上R-PDCAサイクルの推進

- ・各種調査、テスト結果の分析後、全校を訪問し、授業改善の方向性を協議



【個人結果票の一部抜粋】



【羽生市グランドデザインの一部】

### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教育事務所及び教育センター指導主事として】

- 全国学力・学習状況調査や福岡県学力調査を活用してPDCAを推進する。
  - ・児童生徒質問紙から学級経営の充実を見取る等、Pの前に実態把握(Research)の視点を意識
  - ・年間の大きなサイクルだけでなく、単元や学期ごとの小さなPDCAサイクルを意識
- 各教育事務所主催の研修や学校訪問等において、次の点を発信する。
  - ・非認知的能力や学習方略等を育成するための基盤となる学級経営を充実させるために、「鍛ほめ福岡メソッド」の奨励、推進
  - ・力量のある教員を抽出し、効果のある取組を事例集として取りまとめる。

#### 【先進地域視察研修を通して実感したこと】

- 児童生徒の学力の伸びを適切に分析するサポートを行い、効果が見られた取組についての情報を収集し発信することが大切である。
- 児童生徒に何が身につくかを明確にし、個に応じてどのような支援を行うかを計画した授業を推進することが大切である。

## 共通テーマ「授業づくりについて」

### 取組の実際

#### ◆久喜市の授業づくり

#### ◇授業構想時の思考ルートを明確化する工夫

- ・単元構想シート、授業構想シートの活用

＜単元構想シートの作成手順＞

- ①単元終了後の目指す児童生徒の姿を具体化
- ②単元がもつ「知の構造」を分析
- ③問題解決のプロセスを計画

※単元構想後、授業構想シートを使って、児童生徒の思考の流れに基づき本時授業を構想

#### ◆羽生市の授業づくり

#### ◇個別の対応を図る工夫

- ・授業の自力活動やまとめの段階に、児童生徒が自分の状況を数値化(1:分からない 2:自力で解ける 3:説明できる 3+:3以上)  
→教師は、授業中につまずいている児童生徒を把握できる。  
→学習の流れの中で、児童生徒の理解度を把握し、授業を工夫して進めることができる。(個別対応や集団解決など)

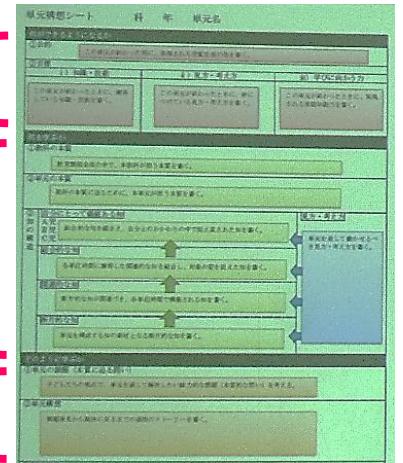
#### ◇授業者の工夫の効果を確認する研究授業の協議会

- ・学力層別の分析  
→学力層に応じた手立ての検証を行うことができる。  
→参観する児童生徒を割り振り、参観者は、一単位時間における担当した児童生徒の反応を記録する。

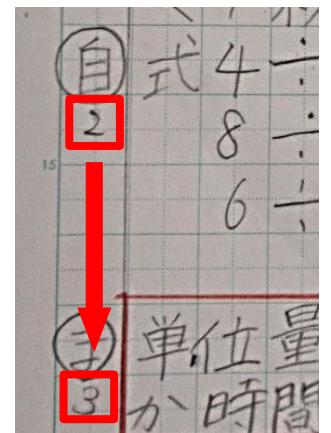
①

②

③



【単元構想シート】



【自己評価したノート】

### 今後、各学校で実践していきたい取組

#### 【教育事務所及び教育センター指導主事として】

- 基本研修や校内研修等において指導・助言をする際、次の点を積極的に取り入れる。
  - ・全国学力・学習状況調査等から明らかになった課題を基にして、各教科で目指す児童生徒の姿を具体化するよう促す。
  - ・授業の展開段階や終末段階に、児童生徒が学習の理解度を振り返ることができる場を設定するなどの活動を紹介し、児童生徒の評価を授業改善につなぐことの重要性を伝える。
  - ・児童生徒の学びの変容から教師の手立ての有効性を確かめる研究授業の協議会を進める。